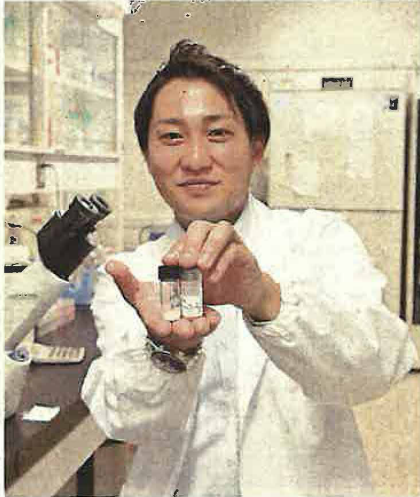


サリドマイドの催奇性を軽減した
新たな化合物の合成に成功した愛媛大
プロテオサイエンスセンターの山中
聡士特定助教

—22日午後、松山市文京町



サリドマイド

催奇性 軽減

愛媛大プロテオサイエンスセンターは22日、センター長の澤崎達也教授(55)とタンパク質科学と山中聡士特定助教(30)らとの研究グループが、催眠作用や免疫調整作用を持つ低分子薬剤サリドマイドの重篤な副作用を軽減した新たな化合物と、タンパク質分解誘導剤の開発に成功したと発表した。

愛媛大 新化合物合成

研究グループによると、サリドマイドは、血液がんの多発性骨髄腫などへの有効性がある一方、服用するなどした妊婦の赤ちゃんが四肢形成の発育不全を起こす「催奇性」があることから使用には厳しい基準がある。

澤崎教授と山中特定助教らは、これまで、同大が開発したコムギ無細胞タンパク質合成技術を使って催奇性の原因となるタンパク質を解明してきた。この研究結果を基に、サリドマイドの構成要素の一部をフッ素や塩素などに置き換えることで催奇性を軽減し、高い抗がん作用を示す新たな化合物を合成。強力な効果があり、最先端治療薬として注目されるタンパク質分解誘導剤にも応用できたとし、澤崎教授は、今回の成果によって使用できる対象が増えることを期待した上で「他の疾患に対する

高い抗がん作用 対象者・用途 拡大に道

薬剤としても使える可能性が示された」と手応えを語った。

山中特定助教は「サリドマイドは大手製薬会社も力を入れているが、今回の成果をつまぐ利用してほしい。催奇性はマウスなどでは評価できないため、より安全性を高めるためのモデルを作る必要がある」と話した。

研究成果に関する論文が英科学誌「ネイチャー・コミュニケーションズ」に掲載された。

サリドマイドは1950年代に当時の西独で開発され、鎮静・睡眠薬として日本を含め世界中で販売された。服用した妊婦から、先天性四肢障害や聴覚障害などのある赤ちゃんが生まれた。日本では62年に販売を停止したが、309人(旧厚生省認定)の被害者を出した。厳重な安全管理を前提に2008年に再認可された。

(大津貴圭)

「サリドマイド催奇性軽減」

2023年8月23日付愛媛新聞(総合)

許可番号:d20230823-04